

—《書評》—

伊藤亜聖著 中央公論新社

『デジタル化する新興国——先進国を超えるか、監視社会の到来か』

(ジャーナリスト) 高口 康太

インド名物の三輪タクシー、リキシャ。「古き良き」という定型句で表現したくなるサービスだが、気づけば米配車アプリ「ウーバー」で乗りたい場所に呼び出せるようになっている。これではコネクテッド三輪ではないか。

インドを訪問した筆者の驚きから本書は始まる。そして、中国屈指の貧困地域である貴州省がアップルをはじめとする大企業のデータセンター集積地となっていることを取りあげたかと思えば、南アフリカの女性エンジニアによるスマートフォンアプリのアイデアを競うビジネスコンペと、地域を縦横無尽に飛び越えて、新興国のデジタル化を生き生きと描いている。

本書は第22回読売・吉野作造賞を受賞するなど高く評価されているが、現地の肌感が伝わる描写が最大の魅力だ。著者の伊藤亜聖・東京大学准教授はフィールドワークを重ねた、解像度の高い研究で知られる。本書では、専門である中国を飛びだし、インド、ミャンマー、エチオピアなど、多くの地域を訪ね歩いた経験が詰め込まれている。

さらに付け加えるならば、本書の提起は多くの日本人の危機感にも合致するものであろう。この20年、日本はデジタルという新領域で負け続けた。2000年代初頭からは米国のITプラットフォーマーが世界を席巻するのを黙って見ているしかなかった。2010年代には中国のデジタルエコノミーが大きく発展し、GDPで逆転しただけではなく、デジタル化でも追い抜かれた。

そして、新型コロナウイルスの流行だ。リモートワークや遠隔授業の普及比率の低さ、接触追跡アプリやワクチン接種管理の混乱など、危機を迎えてデジタル化の遅れによる弊害が一気に表面化

したとの感は強い。

そこで本書の登場だ。新興国においてもデジタル化は大いに進展し、社会を変えつつある……。

米国や中国は言うに及ばず、新興国にも追い抜かれているのか。副題の「先進国を超えるか」との文言は、日本の停滞、落伍におびえる危機感に寄り添うものである。

こうした刺激的な枠組みが目につくが、それで終わらず、デジタル新興国の可能性とリスクを冷静に評価している点にこそ、本書の真骨頂がある。

さて、いささか先走って評価を述べてしまったが、本書の構成に沿って内容を紹介したい。

序 章 想像を超える新興国

第1章 デジタル化と新興国の現在

第2章 課題解決の地殻変動

第3章 跳び越え型発展の論理

第4章 新興国リスクの虚実

第5章 デジタル権威主義とポスト・トゥルース

第6章 共創パートナーとしての日本へ

序章と第1章では課題とフレームワークが示されている。カギを握るのはデジタル経済と新興国論である。複製コストが限りなく低く限界費用が低いこと、一度特定のサービスを利用てしまえば乗り換えが難しいこと（ロックイン効果）、多くの利用者を集めることそのものが利便性向上につながるネットワーク外部性というデジタル経済の特徴は、それまでの経済構造とどのような違いを持つのか。そして、南北問題、工業化、市場としての新興国と変遷を続けてきた新興国論の系譜にデジタル経済はどう位置づけられるのかとの課題が示される。

第2章、第3章ではデジタル化のポジティブな側面が描かれる。信用創出の仕組みによるネットショッピングの構築、交通の課題を解決した配車アプリ、ドローン空撮による農業データの共有、漁業トレーサビリティによる効率化、担保資産を

持たない人でもお金を借りられる金融包摶、必要な機能が集約されたスーパー・アプリなどのサービスが紹介される。

なぜ先進国以上のペースで新たなサービスが普及しているのか。その原動力は課題解決型と飛び越え型という二つの要素があるという。たとえば、新興国では信頼できない取引相手が多いという課題があり、ビジネスを円滑に進めるのが容易ではない。その際、信頼を担保する第三者であるプラットフォーム企業が与える正の影響は大きい。ATM網が整備されていない地域では、先進国では一般的な金融インフラの整備を飛び越えて、携帯電話による送金、決済が普及するというわけだ。もっとも、課題解決型と飛び越え型を正確に切り分けることは難しい。先進国並のインフラやサービスが整っていないという課題があるからこそ、新たな技術がいち早く普及する素地があるといった具合に、両者は相補的な関係にあるからだ。

また、3章では工業化でも議論された、後発性の優位、幼稚産業保護論、社会的能力などの論点がデジタル経済において、どのように作用しているかを検討している。先行者を参照することでキャッチアップすることはできても、追い抜くことはきわめて難度が高い。一部では先進国を上回る進化を見せる新興国のデジタル化、それを可能とした要因とはなにか。

「試行錯誤の回数が多いためである。デジタル化に求められる社会的な能力はさまざまな試行錯誤をする環境を整えることだといえる」(127ページ)と本書は指摘し、規制のゆるさやあるいは社会的課題が明確であるがゆえ可能となる試行回数の多さに答えを求めている。課題の多さや規制の未整備という、かつては欠点とされていたものがデジタル化においては、むしろ発展を加速させるリソースになっているという逆説が存在している。

想像を超えてデジタル化が進む新興国の現状、

圧倒的な数の試行錯誤から先進国にも通用するサービスが開発されているさまに驚く人は多いだろう。しかしながら、こうした事象は何も新興国が技術的に先進国に追いついたことを意味しているわけではない。むしろ基盤となる技術やインフラは米国を中心とした先進国の大手IT企業によって担われ、その上での応用、社会実装の巧みさが光ると本書は指摘する。新興国のデジタル化というと、往々にして技術力の逆転と誤解されるが、社会実装の速度など、比較できない、異なる軸での発展だ。基幹技術を先進国に依存していることは弱点にもつながる。4章、5章ではネガティブな側面が描かれるが、基幹技術の欠如、デジタル化による雇用への負の影響、プラットフォーム企業による独占の懸念、さらにはフェイクニュースの氾濫やデジタル技術による権威主義体制の強化といった問題が取りあげられている。

これらの問題は先進国にも共通しているが、そのリスクは新興国のはうが高いという。たとえばフェイクニュースは世界中どこにでも存在しているが、新興国にはファクトチェックを実行できるだけの体力と質を持ったメディアはない。

デジタル化が新興国にもたらす正負の影響をまとめた後、第6章では日本の立ち位置が検討される。南北問題や工業化がテーマの時代には政府開発援助や直接投資の担い手として、BRICsなど新興国市場が注目された時代には課題先進国として、日本は自らを位置づけてきた。今、到来したデジタル化の時代において、日本はどのような立ち位置をとるべきかとの問いだ。日本のプレゼンスが低下しているのみならず、デジタル敗戦という挫折を味わうなかで、果たして何が可能なのか。

本書は「共創パートナー」に可能性を求める。デジタル実験場である新興国の取り組みに関与し、ともに試行錯誤を経験することから答えを見つけるしかないのだという。

(2020年10月刊、246ページ、820円+税)